

保健室からみた子ども・親たち

田口 孝

丸ごとの子どもを愛しているか

二月、二年生のAちゃんが毎日どこかけがをして保健室にやってくるようになりました。何があったのでしょうか。「もうすぐ三年生。春からは妹が入学。あんな姉さんなんだから、自分の部屋で一人で寝なさい」と言われたのが原因らしい。Aちゃんはもっともって親と一緒に寝たいのです。日替わりメニューのようなけがはA子の「ゆっくり育ちたいよ」という精一杯のメッセージだったのです。

「こころ育つべき」というマニュアルを押しつけられて

は子どもはたまったもんでありません。

Bちゃんはいつも最新デザインの服を来てくるふっくらした子です。お母さんもおしゃれなヤンママで、ブランド物を身につけPTAにやってきました。

ある時B子の肥満状況を告げる用紙を渡したら、翌朝お母さんがやってきて話します。「この子の肥満のおかげで私は嫌な思いをたくさんしてきました。…親子で揃いのブランド物を着て歩くのが夢だったのに。…私、この子、嫌なんです。…いなきやいいのに」と、はっはっはっと笑います(私は自分の気持ちをこうして表現できるお母さんだからあんまり心配をしていません)

ん)。

Bちゃんのお母さんはB子ちゃんが「太っている」からきらいなのですが、「よい子じゃない」「できない子」だからわが子が「嫌なんです」「恥ずかしいのです」と否定的にとらえる親ができています。学校での評価、つまり社会的評価の学校のみで単眼的に見た「よい子」に育てようとするのが問題です。

「あなたの今のまま、丸ごとを愛しているのよ」というメッセージを子どもは全身で求めているのです。

時短の運動と子育て

服の袷をいつもかんで、唾液でグショグショになっているCさん。気に入らないことがあると床に転がって駄々をこねます。お母さんの帰りは七時過ぎです。すぐにパニックを起こすD君も両親の帰りは九時近く(それまでおばあさんが食事、入浴の世話をする)。

子どもはストレスや疲れ、苦勞をいっただいごで癒すのでしょうか。それは本来家庭なんだと思います。

子どもの心が一番なごむのは食事の時で、一日の出来事をおもいきり話したくなります。食事は、ただ栄養を摂取するだけの場ではありません。

しかし現実はいへん厳しい。その一つが親の労働時間の問題です。お母さんたちのパート労働といってもその仕事は高度であり時間も長い。安価な賃金で正規社員と同じ様な労働を求められています。父親はもちろんのことです。

子どもに子ども時代をしっかりと過ごさせるためには、親が子どもにかかわる時間を増やさないとけません。石田一宏氏(東葛病院医師)の言うように労働時間の短縮の運動が緊急の課題ではないでしょうか。時短の要求と子育ての要求はまさに一致するのだと思います。

子どもの口腔から見えてくる生活

新潟県は全国で唯一、フッ素洗口を行政ぐるみで行っている、「歯Ⅱフッ素」という構図になってしまいました。しかしむし歯だけを追いかけても子どもの口腔問題はとらえきれません。

顎が大きく発達せず歯並びが悪くなる問題、咬み合わせがずれている問題、歯肉炎の問題、大きな口をあけて笑ったり大きな声を出す経験が少なく育ったために口を大きく開けられない子。ストレスが原因で顎関

に口を大きく開けられない子。ストレスが原因で顎関節症になった若い女性教師もいました。

「歯が痛いよう」と泣きながら保健室にE君が来ました。見ると永久歯が生えようとして周囲の歯をグイグイと押し退けているのが原因でした。歯医者からは鎮痛剤をもらって経過をみなさいといわれるだけです（永久歯を丈夫にし、さらに正しい位置に崩出させるために乳歯は大切な役目をはたします。普通、乳歯は安易に抜歯しません）。

鎮痛剤の効き目が切れるとまた激痛が走る。また薬を飲む。こんな状態が三週間ほど続きついに我慢できなくなり抜歯。やれやれと思ったら今度は別の所が同じように痛みだしてきました。E君は現代っ子らしい細面の顔立ちの子です。こういう顔の子どもが増えてきました。同時に歯列の矯正治療に通っている子どもも急増です。人間（ヒト）としての正常な発達「乳歯から永久歯へのはえかわり」が保障されない状況が急速に広まっているのです。

顎の発達を促す子どもの食事はどのようになっていくのでしょうか。『カアサンヤスメ』カレー、サンドイッチ、やきそば、スパゲッティ、目玉焼きに代表される

ような歯ごたえのないものです。「よくかんで食べましょう」といいますが、実際は「よくかんで食べる必要」がないのです。

私は、咀嚼の大切さを考える保健指導で、子どもたちとスルメとポテトチップの噛み比べ実験をここ数年しているのですが、今年ついにスルメを食べきれず、べっと吐き出した子が現れました。また、咀嚼をしないので唾液の分泌が少なく、歯磨きをしているにもかかわらず歯垢が付着しやすいという新たな状態を作り出しています。

米も野菜もおいしい、海産物も豊かな新潟県で「食」を大切に位置づけ、豊かな食卓をつくる努力が求められているのだと思います。

子どもは「あて」にされているか

1年生のF君が「足の指を切った」とやってきました。

「昨日夕方、かあちゃんに「庭に行ってアスパラを取ってこい」といわれたので、鎌でぐいと切ったら、サンダルを履いていたので足まで切っちゃったんだ」とのこと。私は処置をしながら「あらF君、お母さん大助かりだったわね。それに鎌で切ったなんてまるで

お父さんみたいじゃないの。偉いわ」と感心して話すと、F君はニコニコと誇らしそうです。

以前観光地の学校に勤めていた時のこと。中学生のG君がバスケットで遊んでいて足を捻挫して、ひどく腫れあがってしまいました。私は急いで水で冷やし、その後湿布をしながら「今日は安静にして、立ったり歩くのは控えぬにすること」と話すとG君は「えっ」と顔色が変わりました。

彼の家は老舗の旅館で、朝から夜まで働く両親(若女将である母親の忙しさはすごい)を見て育っています。幼い時から、夕方からは兄弟とじいちゃんだけで過ごしてきました。小学生の時は生活リズムが乱れたり、寂しくていらだったりしましたが、自立した生活力のあるG君です。小学校の卒業式で「・・・僕はお父さんと風呂場の掃除をするのが好きです。汗でびしょやりになりながら、お父さんと話をするのが大好きです」と発表しみんなを感動させました。

「安静なんてしてられない」というG君の話を聞くと、中学生になった今、洗い場で十一時頃まで山のよう積み重ねる皿洗いを手伝っているとのことでした。

「先生、人手不足で皿洗いは俺の仕事なんだよ。どう

しようかなあ」と本当に困った様子です。「足は痛いんでしょう？今日は安静が大事だけど、困ったねえ」「うん・・・でも母さん困るだろうなあ。本当に人手不足なんだから」そんな問答をずっと見ていた彼の同級生が突然「いいなあ、お前。あてにされているんだなあ。俺なんて全然だもんなあ」。

そう子どもはあてにされているのを待っています。人格まるごとを信頼されていると感じた時、F君やG君のように子どもはとてつもない力を発揮し、自信を持ち、そしてまた自分を好きになっていくのです。

子どもたちは手伝いを通して知らず知らずにもまめしく動く体や巧みな身のこなし、我慢する力を獲得してきました。現在は家庭での労働そのものが少なくなっています。しかし私は忙しく働く両親のもと、子どもの出番がなくなったとは思えません。個々の家庭の営みの中で、子どもの出番はどこにあるのか丁寧に探ってみる必要があると思います。

私たち大人が学校社会の呪縛にかられて「そんなことより、勉強」と煽り立てることのないように。

(たぐち たか||長岡市)